

「願仏慈悲示我徑路」

という願の表現を見取ったのである。つまり韋提希が「自絶璣珞、拳身投地」と表現される如く、自己保身的なる具を捨離して問うた問は「我宿何罪云々」という問であるが、その中に虚構化されてあった既存の宗教の壊滅ということを通して、そこに「示我徑路」という根源的な求道心を見開いたのである。かくして問の成就がここに示され、問の成就は即、真実教の開顯なることを知るのである。

親鸞の「愚」について

小林 光紀

親鸞は撰号で、「愚禿釈親鸞」をもって自己の名告りとしてい
るが、何故に親鸞はそう名告らずにおられなかったのか、また、
その「愚」は親鸞一個人にとどまるものであるのかどうか、つま
り、科学、知識の氾濫する現代に生きる我々にとっても問題とな
るべき「愚」であるのかどうか。

「愚」について『六要鈔』では、それが智に對し、賢に對する
語であるけれども、実はそれは卑謙の詞であって、親鸞の徳は智
であり、賢であると述べてある。しかし、はたして「愚禿釈親
鸞」と名告った親鸞において「愚」の字は、そのような卑謙の詞
でしかなかったのであろうか。

そもそも卑謙とは、常に他を意識してのものであって、他を意

識したものである限り、「愚」といっても、それは本当の「愚」
とはいえず、その「愚」は相対的な「愚」に墮してしまふ。相
対的な「愚」は、「愚」と名告ることにおいて「愚」と名告った
自己の智賢をはこる慢でしかないことは明らかであるが、親鸞の
「愚」とは、そのような相対的な愚、あるいは日常的自己反省的な愚
を意味するものではなく、もっと深い意味をもつ「愚」ではない
か。

親鸞は善導の『観經疏』三心釈における至誠心釈中の「不得外
現賢善精進之相内懷虚仮」の文章を「信卷」において引文する際
に、「不_レ得_外現_{賢善精進之相}内懷_{虚仮}」と訓むのが普通の
訓み方であるにもかかわらず、「不_レ得_外現_{賢善精進之相}内懷_{虚仮}」
懷_{虚仮}「虚仮」というように独自の訓点を施してある。この二つの
訓点は、あたかも同じことを意味するようであるが、それらの二
つの訓点においては大きな差異があるといわねばならない。とい
うよりはむしろ「不得外現賢善精進之相内懷虚仮」の文の捉えか
たにおいて二つの立場がでてくるともいえる。その第一の立場は
倫理的立場にたつて、内なる虚仮を懐くことを誡め、外なる相と
一致させる賢における内外相応の立場であり、倫理的完全性を志
向する人間像である。それに対して、第二の親鸞の立場は人間の
倫理的完全性への志向において、そのことが可能であるかの夢想
や、自己自身が完全であるかの錯覚に陥ることなく、実存在とし
ての自己をみつめ、むしろ自己の内にそのような倫理的完全性を
志向すると同じほどの倫理的破壊性をもっていることを如実に語
った自己告白の、愚における内外不相応の立場であり、実存的人

間像である。これは、道緯がいう「外現^{ゴウゲン}三孝順、内懷^{ネイケ}三不孝、外現^{ゴウゲン}三精進、内懷^{ネイケ}三不実」としている「悪人」である。

ともあれ、賢・愚の問題については『愚禿鈔』をみることによって、いっそう明白になってくる。『愚禿鈔』では

聞^{キク}賢者^{ケンシャ}信^{シン} 頭^{カウ}愚禿^{グツ}心^{シン}

賢者^{ケンシャ}信^{シン} 内賢^{ネイケン}外愚^{ゲイグ}也

愚禿^{グツ}心^{シン} 内愚^{ネイグ}外賢^{ゲイケン}也

とあり、信と心において内賢外愚なる賢者と、内愚外賢なる愚者という二つの人間像があらわされている。前者は、信を獲得することにおいて内なる愚性に目覚めことのできた賢者であって、その賢者は内に愚性をもつが故に賢者の振舞いをするのがなく、外にあらわれる相は愚であるとする。(何故にこのようなことが言えるかといえば、親鸞がここでいう賢者とは親鸞にとって善知識であった法然であることは明らかであるし、その法然自身が「愚者にかえりて往生す」と言っているからである。)後者は、信を獲得することなく、己れの心で己れを捉えるが故に、己れの内なる愚性に目覚めることのできない愚者であって、その愚者は自己の愚性に目覚めることなきが故に、賢者の振舞いをし、外にあらわれる相は賢であるとする。

親鸞はこのように内賢外愚なる賢者、内愚外賢なる愚者について語ってはいるが、いわゆる内賢外賢なる賢者、内愚外愚なる愚者については語っていない。賢・愚について一般的に考えられることからいえば、内賢外賢が人間の理想像であり、次が内賢外愚であり、内愚外賢、内愚外愚という順序であるのに対し、親鸞に

とっては内賢外愚、内賢外賢、内愚外愚、内愚外賢の順序であり、そのうちの内賢外賢、内愚外愚という方の人間は、むしろ非存在として捉えられていたのではないかということが、以上のことから想像される。親鸞にとっての人間観は内賢外愚なる賢者か、内愚外賢なる愚者の人間像しかなく、極論すれば、内愚外賢なる相が人間の真実なる相であるとして捉えられていたのではあるまいか。『改邪鈔』においては、たとえ牛泥棒といわれようとも賢者が如き振舞いすることを誡めてある。

故に、親鸞のいう「愚」とは(信心同異の問題とも関連してくるが)決して知識的な智賢に対する相対的愚ではなく、存在そのものが「愚」であるような「愚」、絶対的愚、存在そのものの名告りであって、決して卑謙の詞とはいえない。そして、その絶対的愚といわれる「愚」は無碍の光明に遇うことによつてのみしかその深淵を我々にのぞかせようとはしない。

声聞・独覺・菩薩について

——十地経離垢地の問題——

平野 修

声聞・独覺・菩薩

歴史的に見て、仏教の要点は積尊の初転法輪と入滅にあると考えられる。この二点から仏陀の弟子ということを考えてみたい。積尊の教化(『転法輪』)によつて、利益を得る者があらわれて